

市民満足度調査

の結果をお知らせします

住みよさランキングとは、東洋経済新報社が公的統計のもと、それぞれの市がもつ“都市力”を「安心度」「利便度」「快適度」「富裕度」「住居水準充実度」の5つのカテゴリーに分類し、ランク付けしたものです。今年度の市民満足度調査でも、市民の皆さんに住みよさの調査をしましたので、ご紹介します。

住みよさランキング 2017

中野市は 43 位

※長野県内では、1位

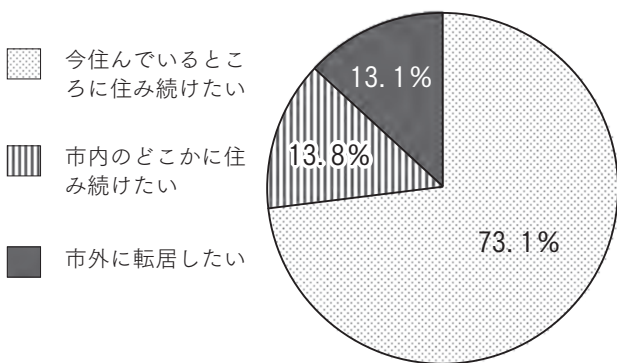
814 都市

問 政策情報課 ☎(22)2111 (内線401)

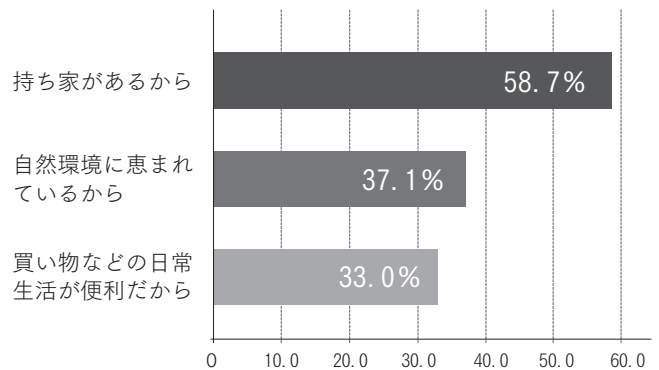
市民満足度調査の詳細は市公式ホームページでもご紹介しています。



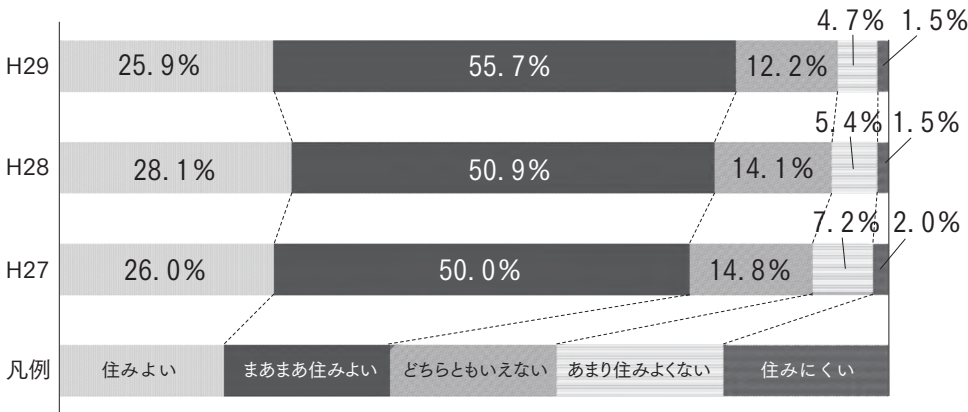
あなたは中野市に住み続けたいですか？



中野市に住み続けたい理由（上位3項目）



中野市の住みやすさ（年度ごと比較）



住みよさ調査結果

「住みよい」「まあまあ住みよい」を足した数値が平成27～29年度にかけて5.6%上昇しています。

また、今回の調査では8割超の人が市内に住み続けたいと回答しています。そのほか、住み続けたい理由として、犯罪の少なさや農産物の豊かさなどが高い数値となりました。

重要な施策 トップ3

(重要度が高かったもの)

- 地域医療の充実 (79.8%)
医療体制の整備・充実、医師確保、医療保険制度の運用
- 水の安全供給 (78.9%)
水の安全供給
- 健康長寿のまちづくり (78.9%)
健康寿命の延伸、心の健康づくり、食育、高齢者の生活支援、介護予防など

課題となる施策 トップ3

(満足度が低かったもの)

- 働きたい人が仕事しやすい環境が整っている (8.7%)
雇用機会の促進と安定、勤労者福祉の充実
- にぎわいと活力あるまちづくり (9.1%)
商工業の振興、観光交流
- 市民サービス向上のため電子自治体実現に向け取り組んでいる (11.2%)
地域情報化の推進

※「第2次中野市総合計画基本構想 前期基本計画」の施策体系から「重要度」「満足度」を調査しました。

市民リレー元気の輪

No.34

高橋 守さん
からのご紹介



○自己紹介

代々農家を営んでいます。祖父の代から、桑園をリンゴ園に転作。市内では、初期のリンゴ栽培の導入だったと聞きます。私は、中野農商学校の農業科を卒業した後に、父の勧めもあり、青森県のリンゴ試験場に3年間、研究員として赴きました。

中野市に帰ってからは、「国光」という品種のリンゴを栽培していました。昭和35年ぐらいに「東北7号」（現在の「ふじ」というリンゴが知られるようになり、青森の試験場から穂木を入手する機会に恵まれました。「これからはふじで行く」と意気込み、昭和48年にかけて、国光からふじに更新。ありがたいことに、このことが評価され「緑白綬有功章」

をいただきました。表彰式では、桂宮宜仁親王殿下と言葉を交わすことができ、一生の思い出を残すことができました。



▲「ふじ」リンゴ畑と町田さん

農業研修生を48人指導し、息子が農家を継いでくれたので、安心して過ごすごうできています。

○元気の秘訣

「くよくよしない」「好き嫌いしない」「体を動かす」。この3つを心掛けています。動ける範囲で動くことを心身に、野菜作りやゲートボールなどもしています。ゲートボールは地域の関係もでき、とても良いスポーツだと感じています。

○おらほの自慢

吉田の秋祭りは、獅子を子どもが演じたり、出店があったりと、毎年盛り上がりがあります。特にお宮の正面に掲げるのぼり旗は7反あり、とても大きいです。昔は、大人数でのぼり旗を設置したのですが、今はクレーン車で簡単に上げられます。ぜひ、来年のお祭りでは、のぼり旗に注目してみてください。

池田市長の

わくわくレポート

vol. 47



中野市の農業と地域づくり

中野市は農業を基幹産業とする都市である、これまでいろいろなところで話す機会があった。生産額（付加価値額）では、市内産業に占める割合は突出しているわけではなく、農業生産に携わる人口が多く、農業の活性化が地域経済の大きなけん引役となることは、誰しもが認めるところだと思ふ。

中野市はその市場占有率、技術水準、ブランド力においてキノコ、果樹を中心とした農業の先進地域である。経済は人の営み、人の動態が基本にある。この農業における先進性をさらに推し進め、不動のものとし、中野市の農業の未来を明るくする。その結果として押し上げられた地域の魅力が、ほかの地域からの流入人口を増やし、ひいては多くの人を引き付けると思ふ。

新規就農についても、先進技術、進取の気性がある地域に人は憧れ、集まるのは誰しもが知る道理である。

横道にそれるが、戦後一貫して生産性を向上させてきた他の産業分野

に比べると、農業分野はこれから生産性の向上面で「のびしろ」がある。ちなみに食料自給率（カロリーベース）で2009年に93%を達成したドイツでは、雇用人口に占める農業従事者は1・6%と日本（3・7%）の半分以下であることから、日本の生産性の向上はまだまだ見込める。昨今のIT技術の導入やIoTといった先端技術の活用なども課題となろう。

農業は農業のみならず多様な側面からも、これからの地域づくりの要である。その一つが観光である。観光の4大要素は気候、自然、文化、食事といわれる。この食事に関していえば、中野市の食材は豊富であり、フルセットでそろおう。農産物を広く内外に知らしめるとともに、食の「おいしい」を創出し、観光振興を図るといった戦略も実効性がある。

いずれにしても、中野市の農業をさらに進めるため、今年から農業経営塾をスタートした。経営塾の人づくりを基本に、農業者のネットワークをつくり、さらに農業の高度化を推し進める中で、魅力ある農業を育てていきたい。